

青春スクロール

母校群像記

<http://t.asahi.com/dnnn>

医師に作家に市長に：新天地開拓

多摩高校の卒業生たちは「新天地」でも輝き続ける。

お灸教室が人気でテレビにも出演する鍼灸師の福永裕子（35、1997年卒）は、病院の臨床検査技師からの転身。高校では陸上部で、すねの痛みを鍼灸院



テレビに出演したり本を出版したり、幅広く活躍する福永



多摩高校 9

で治療したことから、興味を持った。「合宿で教室に布団を敷いて泊まり、銭湯に行ったのが楽しかった」と思い出を語る。独立行政法人・製品評価技術基盤機構バイオテクノロジセンター勤務の姉幸代（37、95年卒）も多摩高卒だ。

虎の門病院の医師小林蓉子（38、94年卒）は今回の連載で紹介した福岡ソフトバンクホークス執行役員の小林至の妹。看護短大から東大に編入、看護師になったが、がん患者に接するうちに「自分の手で何とかしたい」と岡山大学医学部に入り直し

「月に1度は仲間と皇居の周りを走っている」という小林



た。陸上部の長距離選手だった高校時代を「やる時はやるという集中力、オン・オフの切り替えが身についた」と振り返る。

精密機器会社経営者から座間市長に転じ、2期目となる遠藤

三紀夫（56、76年卒）は合唱部だった。「県内でも珍しかった混声合唱が、1学年上に男子部員がおらず危機に。同じクラスから男子4人が入った」。今も頼まれれば、講演会や集会などの後に演歌からフリオ・イグレシアスまで歌う。

13人の運転手を描いた「東京タクシードライバー」で注目される山田清機（50、82年卒）は鉄鋼会社や出版社を経てノンフィクション作家に。2年生だけで臨んだ剣道部の高校総体県予選では、強豪の相模工大付（現・湘南工科大付）に食い下がった。「国語の鷲尾靖先生（故人）の授業は大学並みの水準。朗読は芝居をしているようで鳥肌が立ち、それで本を読むよう

になった。先生がいなければ、書くことが好きにならなかったと思う」と語る。

週刊誌記者からノンフィクション作家となり、「倭人伝、古事記の正体」など歴史物でも知られる足立倫行（66、63、64年度在籍）。3年生になる直前、長崎の高校に転校したが、受験で上京した時、多摩高の卒業式にも出席した。「卒業証書はな



多摩高で柔道部創設。「部長が白帯では格好悪いので大急ぎで黒帯を取った」と話す足立

かったが、忘れられない」と言う。64年の東京五輪の際、自衛隊機が空に描いた五つの輪が校庭から見えた。「多摩川を越えれば文化の中心の東京はすぐだ、ちよっと手を伸ばせば届くんだと思った」

雄大な多摩川のほとりで「自由と責任」を学んだ多摩高の卒業生たち。彼らはいまも全国各地、各界で活躍を続ける。

多摩高は今回で終わります。村山恵二（長野県立松本深志高校卒）が担当し、敬称略で紹介しました。青春スクロールはしばらく休載し、次回は1897年に初の県立中学校（旧制）として設置された希望ヶ丘高校を取り上げます。